明治学院大学『国際学研究』第 50 号, 83－101, 2017 年 3 月

【論　文】特集テーマ「マイノリティの視点から」

ネパールの周縁を生きる

――楽師カースト・ガンダルバの移動をめぐる生活世界――

森　本　　泉

【要 約】

ネパールは 1990 年に民主化が達成されてから，激動の時代を経験してきた。この社会変動を背景に，社会的に周縁化されてきた楽師カースト・ガンダルバはいかに生きてきたのか，彼らの移動をめぐる生活世界からネパールの変化を描くことを試みた。ガンダルバが村々を歩き，楽器サランギを弾き語る生業は，ナショナリズムやエスニシティの動き，そしてトゥーリズム現象に接続し，彼らの道具で不可触の象徴とされてきたサランギは，ネパールの文化として表象されるようになった。また，歩きながら民間医療も行ってきたガンダルバは，近代医療が普及した今日でも医療行為を要求される。他方，社会的周縁の象徴であった肉食や飲酒の慣習は，豊かさを意味するものとなり，高位カーストにも広まった。そして，増大する出稼ぎ者が外国で経験していることは，移動を前提としてきたガンダルバが既に経験してきたことでもあった。この移動をめぐる状況から，トランスローカルに広がる周縁の可能性が見えてくる。

キーワード：ネパール，ガンダルバ，周縁，移動，サランギ，アイデンティティ

境界が逆説的な中心性を獲得するとき，コミュニケーションの周縁・先端部分やその道筋は，複雑な地図や歴史として現れる（クリフォード，2002，p.17）。

1. はじめに

ネパールは 20 世紀半ばに公的に「開国」し，その後冷戦構造を背景に主としてアメリカの影響を受けつつ，他方で旧ソビエトによる影響も受けてきた。東西の対立が解消した後も世界の周縁として，そしてまた地政学的に大国の中国とインドに挟まれたヒマラヤに位置する内陸国として，あたかも開発から取り残されてきたような静的なイメージを持たれてきたことは否めない。もちろん変化がなかったわけではないが，ネパールの社会が大きく変わり始めたのは民主化が達成された 1990 年前後からといえよう。世界で唯一のヒンドゥー王国を標榜してきたネパールでは，この時の民主化により，政治体制が国王による親政から立憲君主制へと移行された。しかしながら民主化達成に寄せられた人々の期待は裏切られ，国内の貧富の格差はますます拡大し，その不満を吸収するようなかたちでマオイスト(1) が 1996 年から 10 年間に及ぶ「人民戦争」を開始した。また，2001 年 6 月 1 日に首都カトマンドゥにあるナラヤンヒティ王宮で国王夫妻をはじめとした王族が殺害された事件が世界に伝えられると，ヒマラヤに抱かれた穏やかな国のイメージが別のものにかわっていった。2006 年 4 月に高揚した反国王運動の結果として国王から全特権が剥奪され，2007 年にヒンドゥー王国から連邦民主共和国に体制転換することが宣言され，260 年以上続いた王朝が幕を閉じることになった。その後，2008 年と 2013 年に制

憲議会選挙が実施され，2015 年に新憲法が制定されたものの政情は安定せず，1990 年代から長期化する政情不安を背景に国境を越えて出稼ぎに行くネパール人は増加の一途を辿っている。これに並行して外国からの送金が増大し，ネパールの国家収入の約 30%を占めるようになった[(2)]。この傾向と相俟って経済のグローバル化は急速に進み，カトマンドゥ等の都市部を中心に消費文化が浸透するようになった。慢性的な電力不足により停電が常態化しているにもかかわらず家電商品が取り揃えられたデパートや，高級ブランド商品が並べられたショッピングモール，各国の料理を提供するフードコートを併設したシネマコンプレックスが次々と現れるようになった。このような外観の変化から，人々の生活が物質的により豊かになっている様子が窺える（森本 2015a）。

出稼ぎをめぐる人々の移動はネパールに限らず世界規模で拡大し，その送り出し国・受け入れ国の双方に大きな影響を与えるようになり，社会学者アーリが提起するような「移動論的転回」（アーリ 2011）等，移民・移動をめぐる議論が各分野で活発化するようになった。例えば，近代化とともに移動が量的に拡大するだけでなく，質的にも多様化することで，これまで居住が前提とされていた人々の生活において旅はその補足と考えられていたのが，今や旅，ないし移動，転地という実践を前提に考えるべき時代になったという指摘がある（クリフォード 2002，カプラン 2003 他）。しかし，本稿で取り上げたいのは，現代の移民が増加するよりも以前から，前近代的社会において周縁化され，土地という生産手段を持たず，移動を前提として生きてきたネパールの楽師カースト・ガンダルバ Gandharba の事例である。移動を常態としてきたガンダルバは，現代のグローバルな資本主義経済が展開する過程で，とりわけ第三世界の人々の多くが生産手段から切り離されて移動するようになった現代世界の変化にどのように適応しているのだろうか。本稿は，ネパールの社会的周縁に位置づけられてきたガンダルバが，こうしたネパール内外の変化をいかに辿ってきたのか，個別具体的な事例からその動態を記述分析することを目的とする。「移動論的転回」が 20 世紀末から論じられるようになったが，そこで注目されてきたのは近代化と関連した移動をめぐる現象であった。これに対し，前近代的な移動から現代の移動を連続的に辿る本研究は，移動をめぐる現象の理解の深化に貢献するものとなろう。

次章で概観するが，ガンダルバとは，ネパール社会において，彼らに特有とされる四弦弓奏楽器サランギ sārangi を携えて聴衆を求めて歩き，歌うことを主たる生業として認識されてきた職業カーストの一つで[(3)]，かつて不可触カーストとして扱われてきたジャート jāt[(4)] である。後述するが，1990 年頃から激動しているネパール社会では，マジョリティであるヒンドゥーと非ヒンドゥーのエスニック・グループの対立構図において，とくに後者がマイノリティとして顕在化するようになった。しかしながら，ガンダルバのようにヒンドゥーであるがその中で周縁化されてきたいわゆる不可触とされてきた人々は，その構図において看過されてきた。また，不可触とされてきた人々の中でも人口の少ないガンダルバは幾重にも周縁化されてきた存在といえる。したがって，ガンダルバの生活世界の変化を描く作業は，近年出稼ぎ労働者が増加している世界の周縁であるネパールの更なる周縁から，ネパールの変化を描こうとする試みともなり，ここに本研究の意義が求められる。

本研究の依拠する主たる一次資料は，カトマンドゥにおける現地調査（1996 年以降断続的に実施）と，具体的事例として取り上げるインフォーマントの 50 代のガンダルバ男性 KB の村があるネパール西部ガンダキ県東部に位置するゴルカ Gorkha 郡（2009 年，2013 年，2014 年，2015 年）で行った現地調査において，筆者と KB，およびその家族や友人との対話を通じて得られた語りがもとになっている。複数のインフォーマントから，本研究の対象として KB の語りを取り上げるのは，前近代的な移動から今日の移動をも通して最も成功しているガンダルバの一人と考えられるからである。具体的には，KB は現在カトマンドゥのトゥーリズム空間に出稼ぎに来ているガンダルバの中で，数少なくなった前近代的な生業形態で

ある弾き語りを経験した一人であり，他方でトゥーリスト相手のビジネスも経験し，更に二人の息子をヨーロッパに出稼ぎに送り出し，それぞれの移動過程でそれなりに成功してきたと考えられる存在である。但し，KB のような成功例ばかりではなく，社会の変化にうまく乗れずに困窮しているガンダルバも少くない。したがって，ここで描かれるガンダルバの生活世界は，どのインフォーマントを取り上げても言えることだが，ガンダルバ全体に敷衍できるものではないことを付言しておく。

本稿の構成は以下のとおりである。まず次章で本稿で取り上げるガンダルバをネパール社会に位置付けるために，先行研究を検討しながら彼らの社会的背景を概観する。3 章で KB の生業を移動―主として歩くこと―に焦点を当てて，歩きながら彼が実践してきたこと，その過程で経験してきた変化を記述分析し，続く 4 章では KB がおかれてきたネパールの社会的周縁からネパール社会の変化がいかに認識されているのかを検討し，終章で KB の生活世界から展望できる現代世界を描く。

2. ガンダルバの概要

1) 社会的位置づけ

ガンダルバとは，ネパール社会の最底辺に位置づけられてきた不浄な職業カースト（Höfer 1979）とされてきた。この社会的位置づけは，ネパールのヒンドゥー的カースト社会を基盤とし，1854 年に制定されたネパールの国法ムルキ・アイン Muluki Ain によってヒエラルキーが体系化されることによってできあがったと考えられる。しかし，そこで体系化された社会関係やそれに集約される社会関係は，ムルキ・アイン制定以前から主にヒンドゥー的カースト制を自文化として持つ人々の間で，高位カーストにある人々との社会実践を通じて浸透していたものであった。但し，ヒンドゥー的カースト制に基づく社会実践のあり方は地域や時代による差がみられ，個人においてもジェンダーや年齢，教育的背景によって温度差が見られる。具体的に不可触とされた人々は，文字通り触れてはならない存在として扱われ，共食を避けられ，村の水場を使わせてもらえない，家の中に入れてもらえない等空間的な制約があった。学校といった公的空間からも排除され，その結果，政治的経済的に周縁化されることになった。こうしたカーストに由来する差別は，1962 年に発布された憲法において法的に禁止されたが，差別をした場合の罰則が定められたわけではなかった。このことに加えて，カーストに由来する社会関係は法によって規定されてきたというよりも慣習的に実践されてきたことから，この憲法によって低位カーストの人々の社会的立場が一変したとは考え難い。

1990 年に民主化が達成されてから発布されたネパール王国憲法において，全ての市民の平等が法的に保障されてからは，少なくとも差別が公的に認められることは避けられるようになったといえる。例えば，学校教育を受ける権利へのアクセスからガンダルバをあからさまに排除することは行われなくなった。しかし，親世代の教育に対する意識や経済状況から現在も必ずしも他ジャートと比べて十分な教育機会を享受しているとは言えず，これまでに築かれてきたカーストを軸にした社会関係が再編されている側面は否めない。また，個人間の社会実践というレベルにおいては，従来の差別的な感覚や慣習がなくなったとは言えない。ごく最近，ガンダルバの調査を行ったネパール人（ガンダルバではない山地民族グルン Gurung）が，自身は外国で学びネパールの調査に来たからガンダルバと共食をするが，彼を受け入れたガンダルバではないカーストに属するホストファミリーにガンダルバの家で食事をすることに難色を示された経験を差別的な感覚や慣習の例として記している（Gurung 2014: 18）。こうした記述からも，実際に対面して何らかの実践がなされる時に，不可触カーストと見なされてきた人々とそれ以外の人々の間に引かれた境界が，従来の社会関係を再編する契機として立ち現れてくることが窺える。

こうした差別に対し，女性やダリット Dalit[(5)] をはじめとしたこれまで社会的に周縁化されてき

た人々が権利を要求し，社会運動を起こすようになった。不可触であった人々の総称であるダリットという名称は，ヒンドゥーの人々の中でもカースト的階梯によって下位に位置づけられ，虐げられてきた人々によって用いられるようになった。この動きは 2007 年の暫定憲法で比例・包摂原理に則って国家機構に参加する権利を保障する条項設立に連なるものであり，それぞれの立場から社会的包摂をめぐって権利を要求する動きがますます活発化するようになった[(6)]。積極的優遇措置を受けるために，ダリットの人々によってこれまで隠蔽されてきたダリットの象徴が前面に打ち出され，同様に，非ヒンドゥーの人々も含めて周縁化されてきた人々によって小規模なジャートが新たに多数創出されることになった[(7)]。ガンダルバの中にはガンダルバは本来ダリットではなかったと主張する人がいる一方で（例えば Nepali 2003），現在では優遇措置を受ける為に積極的にダリットであることを自認し，名乗る人も少なくない（森本（近刊））。しかしながら，そのダリットの社会運動において指導権を握ってきたのは，ダリットの中でも人口的に多いビショカルマ Biśwakarmā（鍛冶屋カーストであるカミの自称）であった（Kisan 2005）。従来のネパール研究においては，ヒマラヤに居住するチベット系民族や山地民族である非ヒンドゥーに注目が集まり，ヒンドゥーはこうした人々を抑圧する「悪者」として捉えられてきた。そのようなヒンドゥーの中でも，そもそも不可触とされ，抑圧されてきたダリットの人々がネパール研究で取り上げられることは相対的に少なかった[(8)]。本稿は，このような社会的位置づけにあるダリットの中でも更にマイノリティであるガンダルバが，激動するネパール社会でいかに自身を再定位してきたのか提示することになる。

2） 生業

職業カーストに共通して言えることだが，ガンダルバは生産手段（土地）を殆ど所有してこなかった為，何らかのサービスを提供することで生計を立てねばならなかった。多くの職業カーストの場合，固定的なパトロン・クライアント関係を通じて生活の糧を得てきたが，ガンダルバの場合は固定的関係を維持することがあまりなかった。その為，彼らの生業とされた歌を歌うことで生計を立てる為に，彼らの歌に報酬を与えてくれる聴衆を求めて様々な地域を歩かねばならなかった。このような歌って（ガウネ gaune）歩く（ヒンネ hīḍne）生業形態から，彼らはネパール社会においてガイネ Gaine という名称で認識されてきた[(9)]。また，歌の報酬として食糧や金品を要求することから，物乞い（マグネ magne）や貧困（ガリーブ garīb）というイメージが，そして何日も，場合によっては数週間，数か月間，水を使って身体や衣類を洗うことができない為，汚れているイメージがガイネという名称に包含されてきた。ガンダルバの生業に由来する行為のあり方や経済状況には地域差が見られるが，近代化により歌を歌って生計を立てることが困難になり，都市雑業に生活の糧を求めるガンダルバも現れてきた（Macdonald 1975a, Hitchcock 1975）。近代化の波が村々に届くとラジオが普及するようになり，彼らのエンターテイナーとしての役割が低減していったのである。しかし，1990 年代半ば以降の政情不安を背景に革命歌を政治集会で歌ったり，敬愛する元国王夫妻を追悼して王宮で起きた事件を歌ったり，制憲議会選挙への投票を呼び掛けるメッセージを歌うようになった。また，これらの歌は直接聴衆に向けて歌われるだけでなく，ラジオやインターネットを通じて国内外に拡散され，歌を伝えるメディアに違いはあるが，再び彼らの社会的役割が認識されるようになった（森本 2015b）。

ガンダルバは歩きながら歌を歌っていただけではなかった。聴衆を求めて歩く道中，薬草を収集し，それらを処方したり，神を口寄せし，神々に供犠と祈りを捧げることで，不調を訴える人々を治療することもしてきた。ガンダルバは古くからこのような呪医的な役割も担ってきたことが指摘されている（Macdonald 1975b）。但し，呪医としての役割は，薬草を用いて治療することもあるが，サランギの音色と歌声で患者を感動させ，治療効果を上げてきたとの指摘もある（Nepali Folklore Society 2009）。もちろん，サランギを弾き，歌を

歌うことと同様，得手不得手があり，歩く全てのガンダルバが呪医的な知識や技術を習得していたわけではない。これらの他に，ガンダルバに特有の生業として魚釣りも挙げられる（Nepali Folklore Society 2009）。村の近くの川や湖で，釣り糸を垂れ，網を投じて魚を獲ってきた。

いずれにしても，自分の土地ではなく，公共空間や場合によっては他者の所有する土地で自らの持てるサービスを提供し，あるいは伝承されてきた知識や技術をもとにジャングルで薬草を採取し，川や湖で魚を獲ることで生活の糧になるものを得てきた。彼らはより多くの報酬や収穫を求めて，より広くの地理的範囲を渉猟しながら地理的知識を得，可能性を拡大することに努めてきた。彼らの行為に対して報酬を与えるネパールのヒンドゥー的カースト社会において，生活の糧を求めて歩くことを通して，地域的多様性を経験し，その経験値を増やしてきた。この活動が，彼らのより戦略的な生き方につながっていると考えられる。

従来ガンダルバの生業として，とりわけサランギを弾き語ることに関心が寄せられてきた。しかし，実際には，必ずしも歌うことだけではなく，上述の呪術的な医療行為（フクネ phukne）[10] をはじめ，その時々のパトロンに何らかのサービスを臨機応変に提供することが彼らの「職業」の姿と考えられ（今井 2003），経済動向に合わせて機敏に，かつ柔軟に活動を変容させてきた（Hitchcock 1975）。移動しながら空間的多様性をただ体感するだけでなく，他者との社会実践を通して社会の変化や要求を敏感に察知してきた。彼らにとってより有利な場所や人々を探し出す洞察力こそが，彼らの生業を支えてきたといえる。

3） 文化

1990 年の民主化以降の変化の過程でナショナリズムが高まるようになると，サランギがネパール文化として再評価され，サランギをそのカーストの象徴とするガンダルバも，ネパールの国民文化を構成する一員であることが再認識されるようになった（Chhetri 1989）。この動きはガンダルバに限られたものではなく，各ジャートの人々が各自の歴史や文化を再構築し，アイデンティティを強調するようになったエスニシティの高揚と連動している。ガンダルバは，18 世紀後半「建国」の父プリトビ・ナラヤン・シャハ Prithbi Narayan Shah がネパールを統一する際，彼の出身地であるゴルカからともにカトマンドゥへ移動し，サランギを弾き，戦況を歌に載せて人々に知らせて歩き（Macdonald 1975a），「建国」に貢献したとされる（Weisethaunet 1997）。このような歴史の主体としてガンダルバは表象され，サランギの奏でる音はネパールのフォークソング等にとって重要な要素となっている[11]。

1990 年代になるとネパールを訪れるトゥーリストが増加するようになった。当時高揚するようになったナショナリズムやエスニシティの動きに連動して，トゥーリズム現象にガンダルバの生業の一部が接続され，サランギがネパール文化として商品化されるようになった。かつてはガンダルバというジャートを示す象徴であり，ネパールのヒンドゥー的カースト社会においては触れることが避けられてきたサランギが，特に外国人トゥーリストを対象にネパールの土産物として売られるようになり，高級ホテルやレストランのインテリアとして飾られるようになった。この過程で，従来弾き手の身体に合わせて作られていた道具（楽器）としてのサランギが，土産物や調度品として売る為に作られるようになった[12]。そのために，持ち運びに便利な小型のサランギや，ネパールらしさを演出する宗教的表象を彫り込んだ装飾的なサランギが作られるようになった（Gurung 2014，Morimoto 2002，森本 2012　第 7 章）。

こうしてサランギがネパール文化として表象され，商品化されて再評価されるようになった一方で，ネパールで高名な音楽家として名を馳せたガンダルバであるラム・サラン・ネパリ Ram Saran Nepali は，ヒンドゥー的カースト社会において音楽保持者としての自尊心を持とうとすると，必然的に不可触性を伴ってしまうというアンヴィヴァレントなジレンマから逃れることができなかったという（Weisethaunet 1997, 1998）。つまりサラン

ギというモノやその奏でる音については，文字通りガンダルバの手を離れ，そしてガンダルバというカーストの枠を越えて，ネパールを表象するアイコンとなり，広く流布するようになったものの，サランギを自らのアイデンティティの象徴とするガンダルバは必ずしも同等の社会的地位を獲得しているとは言えなかったのである。例えば音楽の商品化という観点から見た時，サランギという楽器やその弾き手としてガンダルバが利用される（商品化される）ことがあっても，彼らが主体となってそこから利益を得る機会は限られており[13]，音楽の保持者としてのアイデンティティを持つガンダルバは近年のネパールにおける音楽の商品化過程で再び周縁化されているのが現状である。先述したように，ガンダルバの生業としてサランギの弾き語りに関心が集中してきたが，ここまで言及してきたガンダルバの研究についても同じことが言える。また，その生業形態から物乞い（マグネ）や貧困（ガリーブ）といった側面が強調され，その要因は不可触であるとされた生得的な属性に求められてきた。ガンダルバの文化や生き方 a way of life について，実際には地域差や年代差があるにもかかわらず，以上のような側面が強調され，一枚岩的なガンダルバ像が描かれてきた。これに対してガンダルバはそもそもダリットではなかったと異議を訴えたのが，Nepali（2003）の研究であった。しかしながら，自らもガンダルバである彼は，カーストに由来するとされる文化的実践を芸術として高く評価しようとネパール各地のガンダルバ文化を収集したものの，その生業としての音楽的側面を強調することになった。他方，ガンダルバの生き方 a way of life をライフ・ヒストリーから描こうとした文化人類学者 Weisethaunet（1997，1998）は，村々をサランギを携えて歩いていた高名な音楽家ジャラクマン・ガンダルバ Jhalakman Gandharba とラム・サランを主たるインフォーマントとし，等身大の個人の特性を描き出している点で他の概観的研究と一線を画している。ジャラクマンとラム・サランの二人に対する音楽についての高い評価とは裏腹に，自らの生得的な属性であるカースト故に差別され，苦しい生活を強いられる状況が描かれるが，移動しながら音楽を実践することを自らの生き方 a way of life とする音楽家としての自尊心と社会的差別のジレンマに悩む心の機微を書き加え，いわば一枚岩的なガンダルバ・イメージに息を吹き込んだといえる。しかしながら，ラム・サランは 1996 年に，ジャラクマンは 2003 年に亡くなっており，その後の激動の時代については Weisethaunet の研究では言及されようもない。彼がガンダルバという自称でありかつ美称ではなく，ガイネという差別的なニュアンスを含む呼称を彼の民族誌において一貫して使用していることが示すように，二人が生きた時代は，ガンダルバが嘆き続けねばならない困難な状況が背景にあったと考えられる。本研究は，Weisethaunet の描いた後のグローバル化が展開し，体制転換期で揺れる時代にも言及し，とりわけ変化の著しいカトマンドゥに出稼ぎに来ているガンダルバ KB の生活世界を描くことで，激動するネパール社会の一側面を提示することになる。また，本稿では特に移動に着目することで，サランギを核とした文化や生き方 a way of life に回収されてきた従来のガンダルバについての研究に新たな地平を切り開くことをも目指す。

前置きが長くなったが，次章では個別具体的な事例を取り上げ，ガンダルバの視点からネパール社会の変化を記述分析する。事例として取り上げる KB は，ビクラム暦[14] 2017 年にネパール西部ラムジュン Lamjung 郡にある村で生まれた。子供の頃から村々を歩いてサランギを弾き，歌ってきた経験がある彼は，現在では数少ない即興歌を作れる弾き語りの名手として認められている。カトマンドゥに出稼ぎに来るようになって，当初は歌うことで収入を得ていたが，やがて得意のサランギ製作の腕を生かしてサランギを売ることで現金収入を増やし，カトマンドゥに来るガンダルバの中でも成功者として評価されている。公的な教育を受けられずに読み書き能力を身につけられなかった彼が，いかに激動するネパールの変化に（近代化やグローバル化と総称される変化を含めて）うまく対応してきたのかを，以下で見ていく。

3. 生活手段としての移動

1) 歩き歌う

KB は幼い頃から歌を歌っていたが，10〜11 歳の頃から祖父について村々を歩き，サランギの弾き方を習うようになった。やがて自分で歌を作って歌えるようになり，年上のガンダルバ達と一緒に遠出をするようになった。出かける時はいつも6〜7 人で一緒に歩き，日中はそれぞれで活動し，当時は時計を持っていなかったので，空を見上げてだいたいの時間を想像し，夕方仲間と落ち合った。夜になると仲間と食事をしてどこで何を歌ってどれだけ稼いだか，情報交換をした。

12〜13 歳の頃にインドのダージリンに初めて遠出し，その他ゴラクプール Gorakpur（ネパールの国境に近いインドの都市），シッキム Sikkim（インド北東部のネパール，チベット，ブータンに囲まれた州）にも足をのばした。インド国境付近では鉄道に乗り，バラトプール Bharatpur から飛行機でゴルカまで飛んだこともあった[15]。その時，空からマルシャンディ Marshyangdi 川[16]が小さく見えたと語る。KB にとってあちこち出掛けるのは楽しみでもあった。歩く道中で聞いた話を歌にすることもあった。昔は，ガンダルバは歌を歌う為に王宮に呼ばれ，国王にダサイン dashain[17] の歌を歌ったりした。KB によると，現在はこうした歌を歌える若いガンダルバはいないという。

昔のガンダルバはドーティ dhoti（腰衣）を巻いて肩に布をかけ，四弦の撥弦楽器であるアルバージ arbāj[18] を携えて，自分たちの食糧として杵でついた干飯であるチウラ chiura[19]と，杖，袋を持って歩いた。袋は報酬として受け取った食糧等を入れる為のものである。当時 KB が一緒に歩いていたお爺さん達は髭もじゃで，酒を飲ませてもらうまで歌い始めなかったという。大きな器に酒を注いでもらい，両手で抱えて飲み干す。酒の滴が髭について白くなり，その滴を手で拭って振り払ったりする。飲んでからようやく歌が始まり，酔いがまわると弾きながら踊り始める。何か月も家を離れ，歩き続けても水を使って身体を洗うこともなく[20]着替えもしなかった。飲食した後の汚れや鼻水をサランギにこすりつけ，それを火のそばに置いておくから煤で黒ずみ「アンティーク」のようになっていく。当時はサランギは使うほど汚れて黒くなっていたものだが，今は売るためにサランギに黒くなる塗料を塗って「アンティーク」に見せかけている。

KB は，ガタナ ghatana（事件を題材にした歌）をよく歌い，村人に喜ばれてきた。歌う報酬としてコメやトウモロコシ等を貰い，ラフレ lāhure[21]のいるところでは衣類を貰った。ジャガイモをたくさんもらうと重くて持ち歩けないのでバザールで換金し，香辛料を手に入れた。グルンの家にはお祭り[22]の時に行くとよいという。村人が「歌って，踊って」と声をかけてくれ，歌うと祭り用に準備した羊やヤギ肉，米飯，酒が振る舞われる[23]。ネワールの家に行けばチウラを出してくれる。塩や薬草のビジネスをして金持ちになったヒマラヤの村にも行って，気前よく食べて飲ませてもらって楽しかった。バフン Bahun・チェトリ Chhetri（高位カースト）の村に行くと食べ物があまりなかった[24]。チェパン Chepang[25] の村にも何度か訪れ，自分が着ていた服を村人にあげた。

カトマンドゥには 13 歳の時に祖父と初めて訪れた。ラムジュンからカトマンドゥへの道中，歌を歌いながら 5 日間歩いてきた。その時は 2 か月ほどカトマンドゥに滞在して，カトマンドゥにある村々を回って金を稼いだ。その 2 年後にシンハ・ダルバール Singha Durbar[26] が焼け落ちたと聞いたので，焼け跡を見たくてカトマンドゥに来た。当時，バスに乗ったら 25 ルピー位でカトマンドゥに行けたが，KB は歌を歌うことでバス代を払わずにバスに乗った。この時ラジオ・ネパールで仕事を得て，シンハ・ダルバールが焼け落ちた歌を歌い，3〜4 か月間働いて金を稼いだ。ラジオ・ネパールで得た収入で買った靴や服を身に着けてラムジュンに戻ると，自分の姿を見て他のガンダルバ達もカトマンドゥに出かけるようになった。

18 歳の時にゴルカの女性と結婚した。結婚当初はラムジュンに住んでいたが，やがて妻の出身地であるゴルカに引っ越した。バス路線が村のバ

ザールまで通じるようになると，カトマンドゥと村の往復が容易になり，滞在期間が短くても移動するようになった。

カトマンドゥのタメル Thamel[27] に行くようになったのは，歌ったらお金を貰えるんじゃないかと周りの人に言われたからであった。サランギの音がトゥーリストに好まれた。やがてトゥーリストに，ネパールの土産物としてサランギを売るようになった。村に戻るとサランギを商品用に作るようになった。村を歩けば歌を歌ってと言われ，歌えばご飯を食べさせてもらえるから食費はかからない。タメルでは食堂で金を払って食べなければならない。タメルにいるより村にいる方が楽しいが，村（山道）を歩くのが大変になってきたから，サランギ・ビジネスをする為にタメルにいる。路上でトゥーリストに声をかけてサランギを売るか，トゥーリストにサランギを売るガンダルバにサランギを売る。昔はサランギがよく売れたけれど，今は滅多に売れないので，タメルにいる方が稼ぎが悪い。それで，今も時々村に歌いに行くことがある。

KB 自身，かつてのように歩か（け）なくなったが，最近の若者は歩かない，苦労をしない，「怠け者」だといって批判する。例えばタメルにたむろする若者達に，村でサランギを作ったり，鶏やヤギ等の家畜を飼育して売れば現金収入になるし，水牛を飼えば乳を飲めるし売れるのに，なぜしないのかと説教をする。KB は村に戻ればサランギを作り，家では常に鶏やヤギ，時々水牛や豚を飼育し，現金収入を得ている。また，家の周りの土地に家畜飼料用のトウモロコシや，自家消費用の野菜を植えている。KB の行ってきた生業はドゥカ dhuka（苦労）と認識され，若い世代からは疎まれ，若者はできれば都市に，可能なら外国へ出稼ぎに行くことを志向する。ガンダルバの中にも生業を離れ，都市や外国へ出稼ぎに行く若者が増えてきたが，一方でネパール人に対して歌って現金収入を求める者も一時より増えた。インフラの発展に伴いバス路線が増えたが頻繁に道路が壊れ，幹線道路で渋滞が常態化しているため，暫く止まっているバスに乗り込んで乗客に歌を聞かせるのである。こうした若者の殆どが子供の頃学校に通った経験があるが，高学年になって中退し，仕事がなくてサランギを弾きながら歌って稼ぐようになった。年長者と歩く経験をしていない若者は，ラジオでポップ・ミュージック等を聞いてアレンジしてサランギを弾きながら歌ったり，フォークソングを歌う。KB は，再びネパール人を対象に歌を歌い，報酬を得ることで生計を立てる近年のガンダルバの若い世代を見て，昔のようにガンダルバに特有とされてきた歌を歌える若者はいないと嘆く。

2） ジャンクリ

KB が祖父と歩き始めるようになった時，習得したのはサランギの弾き語りだけではなかった。祖父はジャンクリ jhãnkrī（呪医）の能力があり，ジャンクリに必要とされる知識や技術を KB にも伝えたのだ。KB がいつものように村々を歩いていた時のこと，目隠しされてどこかへ連れていかれたという。目を開くとどこか分からないジャングルの中で，13 日間，呪文を教えられた。薬草の知識は今も夢を通して教わっている。ジャンクリに必要な薬草等は歩きながら採取したり買い求めたり，ジャンクリ同士で交換したりする。こうして集めたジャンクリ用の薬草や，虎の臍の緒や蜥蜴の手，犀の皮，野蛮人の大腿骨，雷に打たれた石等の小道具は 108 個に及ぶ（**写真 1，2**）。KB は魚の胆汁やイノシシの胆石も薬として用いる。自ら獲った魚の胆汁を干して紙に包んで持っている。かつて一緒に歩いていたお爺さん達の中にはジャンクリであった人が多く，ジャングルでの修業後もそばで施術を見ながらジャンクリに必要な知識や技術を習得していった。有能なジャンクリは，お湯をかけられても火にくべられても死なない。このような強力なジャンクリは，若者達がその技能を受け継がなくなったから，今はもう殆どいなくなってしまったと語る。

医者は手術したりタブレット（薬）を与えたりするのが仕事だが，ジャンクリは人の訴える不調をフクネしたり，何かが憑依していたら動物を供犠し，神々に祈ることで施術する。人々の不調の

写真 1　ジャンクリの施術準備をする KB（2006 年）

写真 2　ジャンクリ用の小道具
虎の臍の緒や蜥蜴の手（2006 年）

訴えに対し，覇気が失われた，悪霊が憑依している，呪文がかけられている等といったことで不調の原因を説明し，それぞれにあった方法で施術する。憑依する理由は特にないが，憑依されやすい人はいる。また，悪霊から守るための呪文をこめた御守を作ったり，他人に魔術をかけるよう頼まれることもある。例えば，人に好意を抱かせる魔術がそれである。呪文をかけた食べ物を，依頼人の想い人に食べさせると，依頼人のことが好きになって一緒になるという。但し，6 か月で呪文を解除しなければ頭がおかしくなるのでその頃に解除するが，6 か月間もあれば子供ができて，呪文から目覚めても相手（女性が想定される）は子供もいることだし，と諦めて男と一緒に居続けるというのである。

施術を依頼する人々は，歌の聴衆と同様，様々なジャートの人々であり，こうした施術をする際に，ガンダルバとどのように接触するかに温度差がある。ガンダルバを家の中に入れず，施術を庭先で行う人は今でも存在するし，また脈を見たり，悪霊を落とすために頭や肩を叩いたり，浄めるために水をかけたり，薬を与えたりといった不可避な接触の後，金（きん）で浄めた水で浄化する人もいるという。ジャンクリの仕事は必ずしもガンダルバだけに特有とされるものではないが，社会的周縁性が高い方が強力な超自然能力を有するというイメージがある。ある時，KB が村を歩いていた時に施術中の二人の山地民のジャンクリに出会った。「心臓を喰われた」と不調を訴える人に対して施術を行っていたがうまくいかず，そこに KB が加わり 3 人で神様を呼び寄せ，米粒を撒いてその散らばり具合から不調の原因を探った。その結果，身近な親族が不調者に非常に強力な魔術をかけていることが分かり，二羽の雌鶏を神に供犠して祈った。この供犠により，不調者は口から血を吐いて元気になった。この時の施術で二人の山地民には 500 ルピーずつ与えられたが，KB には 1,500 ルピーが与えられたという。このような語りに，ジャート間に引かれた境界線が仄見えてくる。

有能なジャンクリであれば口伝えで噂が広まり，遠方からも治療を求めて人々が訪ねてくるようになる。KB は有能なジャンクリとして知られ，ゴルカの村にいれば不調を訴える人が遠路はるばる家を訪ねてくるし，カトマンドゥにいれば携帯電話で予約を取り付けて訪ねてくる。2013 年に筆者が KB の村にいた時，朝 5 時過ぎに老婆が KB の家の前庭に座っていた。その日，山道を片道歩いて 3 時間かかる病院に行かねばならず，不調で弱っている為，歩く自信がないのでフクネして欲しいというのが主訴であった。不調で病院に行く理由は，数日前に家の中で転んで胸を強打し，痛みがなくならないから，ということであった。KB は老婆が往復歩けるように箒（普段庭先や縁台を掃除するのに使う普段使いの箒）で胸部と背中を

なでながら呪文を唱え，耳元で指をぱちっと鳴らして「ハッ」と息を吹きかけ，箒を投げ出し施術を終了した。その日の夕刻，老婆は肝心の医師が不在であったため,診察はしてもらえなかったが，フクネしてもらったお陰で往復歩いて 6 時間，病院に行って元気に戻ってこられたことを喜んで報告に来た。老婆に限らず，朝に晩に，村人が駆け込んで KB を倒れた人のいる現場に連れていったり，病人を連れてきたりする（**写真 3**）。カトマンドゥにいる時は，携帯電話で予約を受け付け，施術の為にバスに乗って出かけたり，彼を訪ねて患者が来たりする（**写真 4**）。村人には無報酬で施術することが多いが，カトマンドゥにおいては見知らぬ人への施術が多く，高額な報酬を要求することもある。

かつて，ガンダルバは広範囲を歩いて歌い，必要に応じてジャンクリをしてきた。車道がなく，病院がないネパールの村において，移動するジャンクリは非常に重要な存在であったと言えよう。近年のネパールではインフラが発展し，近代的な病院が増え，近代医療が普及してきた。このような中で自他ともに認めるジャンクリである KB 自身は，自分の不調時には薬局に行って薬を買い，服用する。また，妻が出産後不調を訴えた時は，先述の山道を歩いて片道 3 時間かかる病院まで籠に乗せて運び，入院させたこともあった。現金のなかった KB は，ドイツ人の医師に「お金がありません」といって医療費のかわりにサランギを作って渡したという。KB の次女は父親の施術を幼い頃から傍で見て医療に関心を抱き，看護師になることにしたという。次女が現在カトマンドゥの看護学校に通い，近いうちに看護師資格を取得する予定であることを嬉しそうに語る。他方で，夜，夢の中に悪霊が現れたので戦い，フクネをして退治してやったと語り，丸めた拳に息を吹きかける仕草をしていかに戦ったのか見せたりする。また，30 歳を過ぎても結婚しようとしない長女に何かが憑依しているのではないか心配して脈をみたところ，何も憑いていなかったのでフクネすることもできないといって困ったような顔をする。ネパールにおいて近代医療が発展・普及している中で，KB に不調を訴える人が絶えないのは，KB 自身がそうであるように，ネパールの人々の中に前近代的なジャンクリの施術と近代医療の両者をうまく使い分けている人が一定数いることを示している。KB は前近代社会と近代社会の境界にいて，両者を橋渡しする役割を担っていると言えよう。

3） 移動と社会地図

本節では上述のガンダルバの歩くことを前提としてきた生業について小括する。

写真 3　元気のない子供にフクネする（2013 年）

写真 4　ジャンクリの予約を受ける（2007 年）

写真 5　釣り　牛糞と籾を投げ入れて魚をおびき寄せる（2014 年）

写真 6　釣り糸を垂れる（2014 年）

KB にとって歩くことは何を意味するのだろうか。ネパール内であってもヒマラヤの山地の人々は母語が異なり，何を言っているか分からず，コミュニケーションが取れず想像して歩くしかない地域があったという。そうした経験から，バスに乗り合わせた人々の言葉を聞いて，だいたいどの民族かあてることができる。村を歩くうちに少しずつ諸民族の言語を覚えていったのである。彼にとって重要な肉や酒に関する現地語には特に詳しい。KB に限らずガンダルバの多くは食べることが好きで，飲食に関する文化的禁忌も少ないことも手伝って，行った先々で出されたものを食べてきた。その結果，地域の美味しいものについてよく知っている。ネパールは多民族社会で非ヒンドゥーの人々の文化も多様である上に，ヒンドゥーといってもカーストに由来する文化的禁忌がジャート間で異なり，ガンダルバは歩きながらこうした多様性を体感してきたといえる。

彼は自分の好きな肉や酒を気前よく振る舞ってくれる人々を求め，聴衆の喜ぶ歌を作って歌ってきた。村人を喜ばせることは，彼にとっても嬉しい結果，即ち多くの報酬，美味しい食事，楽しい時間をもたらすことになった。広範囲にわたる移動を通して，ネパールの多くのジャートと接触してきた経験から，それぞれの村や場所に対するイメージを描き，ネパールの文化的多様性を，紙面からではなく現場での社会実践を通して体感してきたのである。金持ちで気前が良いとか，酒を飲ませてくれるとか，食事が美味しいとか，歌を楽しんでくれるとか，ケチで食事が貧相とか，貧しくて大変そうとか，いうなればネパールの多様性を示す社会地図が，彼の歩き歌う行為を戦略的に実践する経験を通して，彼の中で描かれてきたと考えられる。そして幼い時からネパール内外を年長者と歩き，培われてきた方向感覚は，その地図上を歩く重要な方位磁針として機能している。

地理的知識は民族や文化についての多様性にとどまらない。彼が歩いた，あるいは乗り物に乗って移動した範囲は広範にわたり，紙の地図を見なくても，山や川の位置関係，道路網が頭に入っている。道路や川を指さし，その先を辿るとどこに行きつくのか，地名をいくつも挙げてくれる。川もまた，釣りが得意な彼にとって重要な場所である。特にモンスーンの季節に，どのあたりでどのような魚が獲れるのか，毎年同じ場所で同じように釣り糸を垂れ，川を観察していることから環境変化にも敏感である（**写真 5，6**）。近年，漁獲量が減ったことの理由として，川の上流で人々が網で魚を獲ったり，毒や電気ショックで魚を獲るようになったからだと語る。また，ヒマラヤの標高差によって織りなされる多様な自然環境を体感し，各地域の動植物に関する知識も豊富である。歩きながら出かけた先々でその地域特有の薬草を採取したり，特産物を求めたりすることで，彼の

社会地図に情報が上書きされていく。

KBの地理的知識を豊かにしてきた歩く行為は，ガンダルバの子供達が教育を受けられるようになったことで，ほぼ途絶えたと考えられる。歩きながら継承されてきた知識や技術は，ガンダルバの次世代にあまり伝えられていない。KB の息子達も子供の頃はサランギに触れさせてもらえず，長男は就学の為にカトマンドゥに来てからガンダルバではない専門の先生について横笛の吹き方を習っていた。ナショナリズムやエスニシティの高揚を背景に，サランギをうまく弾き語れない若者達が楽師カーストであることを誇らし気に名乗ることに対し，KB は，歌も歌えないのにと批判する。その若者世代は，サランギを携えてネパールを歩くかわりに，国境を越えて出稼ぎ・留学に行くようになった。KB の二人の息子も現在フランスとポルトガルにいて，日常的に携帯電話を通して会話が交わされている。電話をする際に KB はネパールの村にいながらフランスやポルトガルの時間を意識し，食事の時間帯には食事をしたかどうか気にしている。息子の他に近い親族が二人イギリスにいることで，彼の中の時間軸はネパールを中心に複数ある。かつては時計を持たずに移動していた KB が，複数の時間の中で生きているのである。彼が実際に歩いて経験してきた生活世界は電話回線（より正確に言うと携帯電話のアンテナや送金網）を通じて拡大し，息子達からの情報や送金によって，明らかに KB の生活世界は質的にも変容してきた。紙面に描かれた地図を見ずとも，彼自身の経験に基づいて地理的想像力を働かせて，彼に必要な地図を頭に描き，随時変更を上書きし，新しい時代に対応しているのである。

4. 社会的周縁を生きる

1） 肉をめぐる変化

ネパールのヒンドゥー的社会において，肉食は文化的禁忌に抵触する。牛肉食は宗教的にヒンドゥーにおいてタブー視されているが，あるジャートによっては牛肉食が認められているし，マオイストが「人民戦争」を展開している時には反ヒンドゥーを掲げて牛肉食を勧めていたこともあった。牛肉以外についても肉の種類によって文化的禁忌がそれぞれ異なる。社会的周縁に位置づけられているガンダルバの場合は，こうした文化的禁忌は緩く，中には牛肉食をしたことを公言する人もいる[28]。ヤギ，水牛，鶏，豚等，一般に流通している肉類は経済的に許されれば食べる。酒についても同様である。自宅で濁酒を作ったり，それを蒸留したりして飲用する他，経済的に許されれば購入して飲む。男性に限らず女性も飲む。

一年の中で最も肉を消費するのはダサインの祭りの時である。ダサイン前，人に会うとどこでどの肉をいくらで仕入れたのか，情報交換が行われる。2014 年のダサインを筆者はゴルカの KB の家で過ごしたが，その時に KB が購入した肉は，4 人家族（＋筆者）で水牛 2.5 パティ[29]，ヤギ 2.5 kg，豚 4 kgであった。水牛はガンダルバの親族が集まって共同で 2 頭購入し供犠したのだが，若者達の多くは外国へ出稼ぎに行って留守で，残された高齢者は朝から酒を飲み，集合に時間がかかった。本来はサランギを弾き，神に歌を捧げて供犠した後，水牛の頭を神に捧げなければならないのだが，供犠の始まった時間が既に遅く，日が暮れて暗くなってしまうことを理由に，また酔ったガンダルバがサランギを面倒がって持ってこなかった為にサランギの演奏もなく適当に歌ってごまかした。そして，水牛の首を切った後，水牛の頭を神に捧げる作業も省略して，すぐに食肉用に解体する作業に取り掛かった。KB は村では高齢者に属するが，本来は若者がやるべき水牛の首を切る作業を KB が行った（**写真 7**）。KB の親族にあたるイギリスに住んでいる比較的若いガンダルバが作業に加わったが，供犠や解体作業に関わった経験があまりなく，高齢者に指示を仰ぎながら作業を行っていた。数少ない若者は携帯電話で作業の様子を写真に撮るが作業自体はあまりやりたがらず，次世代にこうした作業も継承されていない。KB はダサインの間中，連日食肉の解体作業に積極的に加わり，作業の報酬としてその場で振る舞われる肉と酒に興じ，毎日帰宅する頃には酔っ払っていた。庭先で鶏を 10 羽以上飼っていたが，この祭りの

写真 7　水牛の供犠（2014 年）

間，4 羽がいなくなった。2 羽いた雄鶏のうち 1 羽を祭りの際に供犠し，その後おかずとして消費した。もう 1 羽は，近所の村人に供犠用に買われていった。電力が十分にない村で，冷蔵庫もないことから，すぐに食べない肉は 3 日間ほど竈に火を焚き，煙をかけて燻製にする。燻製にする前に，家に持ち帰った肉を家族総出で適度な大きさに切り，干し肉用の木に肉をかけていく。祭りの間は客人が相次ぐことから，肉も酒も次々となくなっていく。

肉食や飲酒という慣習は社会的周縁性の象徴であったが，ネパールにおいて高位カーストの人々が肉の種類にこだわりがあるにしても肉食を始め，ビールやワイン，洋酒を飲むようになり，必ずしも社会的周縁性を意味しなくなった。むしろ，豊かさの象徴として捉えられるようになった。これに対し，肉食，飲酒を慣習としてきた低位カーストの人々で経済的余裕がない人々は，肉類の需要増大に伴う価格高騰により肉食が困難になり，その上個人で醸造した安価な酒の販売が法的に禁じられ，酒も手に入りにくくなった。相対的に高位カーストの人々の方が裕福であることが多いことから，肉食や飲酒に関してかつてとは逆転するような状況が生じている。

2）サランギをめぐる変化

2 章で言及したように，サランギは不可触の象徴としてではなく，今はネパールを代表する文化として表象されるようになった。しかしながら，実際にガンダルバにとってどのような意味があるのだろうか。

KB は自他ともに優れたサランギ奏者として，また歌い手としてのみならず，作り手としても認められている。先に触れたように，サランギを弾き語れない若者がネパールの伝統的楽師としてのアイデンティティを表象することを苦々しく思っている。このような変化を背景に，KB はより真正なガンダルバとして他と差異化を図ろうとしている。例えば，「本物」のサランギを作って弾いて見せ，それがいかに真正であるかを語る。近年のサランギは，弓には釣り糸，弦には高音を奏でる金属線が 1 本と，バトミントンのガットや釣り糸が 3 本張られている。これらの弦は容易に手に入るし，雨が降って濡れても切れることがない。KB も通常そのようなサランギを作り，使っているが，ある時 KB が子供の頃に弾いていたサランギを再現して作ったのである。ジャングルから切り出したカロ khalo の木を彫り抜き，胴にヤギの皮を張るところまでは同様であるが，ヤギの腸から取り出した筋を日陰で干して乾かし，丁寧に縒って弦として張り，弓には馬の尻尾を貰ってきて張った。馬の尻尾はシンハ・ダルバールや，ヒマラヤで飼われている馬[30] の尻尾を梳いた時に出る毛玉の状態になったものを貰ってくる。ヤギの腸で作った弦は雨に濡れると切れるし，下手が弾いても切れてしまう。奏でる音が低いので，高い声で歌わなければならない。このヤギの腸の弦が張られたサランギを弾いて歌えるガンダルバは，あまりいないし（**写真 8**），作れるガンダルバはもっと少ない。KB がこのようなサランギを作ったこと，換言すると自身についてガンダルバとしての真正性を表象しようとしているのは，ネパール全体でナショナリズムやエスニシティが高揚している動きと無関係ではない。

その一方で，KB は歌う気がない時はサランギをカバンにしまっている。サランギを見せなければガンダルバであることは分からず歌を所望されることもなく，不可触として扱われ不必要に不快な思いをすることもない。サランギには，今もガ

ンダルバの象徴として機能している側面があるからである。しかし,「人民戦争」中，サランギを見せることで身の危険を回避したことがあったという。マオイストが村々を歩くようになると村人は見知らぬ人に警戒心を抱き，攻撃的になることがあった。そのような状況で，KB は警戒心を抱いた村人に対してサランギを見せて弾き，歌うことでマオイストではなくガンダルバであることを理解してもらい，攻撃を回避したのである。

KB にとってサランギは生業の道具であり，現金獲得手段として作るものでもあり，自身のアイデンティティを表す象徴でもある。現代のネパールにおいてサランギ自体はその文化的要素として表象される時，ある意味でガンダルバを越えたものとして認識され，扱われている。他方で，サランギを道具としてきたガンダルバは，ネパールの文化を構成する一員として認識されているものの，個人間の社会実践レベルでは，カースト的なヒエラルキーによって引かれた境界で差異化される状況に今もあることは否定できない。サランギの意味が今のネパール社会においていかに評価されているのかを意識するとしないとにかかわらず，そのことを体感している KB は，戦略的にガンダルバとして認識されたい時はサランギを目に見えるようにし，そうでない時は隠すことで，社会的文脈に即して臨機応変に操作する道具として使っているともいえる。

写真 8　ヤギの腸を弦に張ったサランギ（2013 年）

3）社会的周縁の再編

2000 年に入ってからマオイストがゴルカの KB の家に宿と食事を求めてきた時，KB のサランギを見てガンダルバの家であると分かった上で，7 日間 KB の家に滞在し，食事をしたという。同じ空間での共食や，ガンダルバの提供する食べ物が忌避される等，元不可触カーストの扱いをされてきた KB には，非マオイストにとって恐怖の対象となり得るマオイストの滞在は社会的周縁として扱われなかったという点で非常に嬉しい経験となり,「マオイストであってもいい人だった」と語る。この時，KB は村で行われるマオイストの集会の為に歌を作り,ネパールの民族衣装を新調し,コートも着て集会に臨んだという。このことからも，彼の喜びがいかに大きかったか想像される。しかし，残念ながら KB に歌う順番が回ってくる前に集会が終わってしまったという。

KB にとって社会的周縁からの解放の兆しが見えた別の一件が，2015 年 4 月の地震であった。震源に近い村で少なからぬ家が倒壊し，KB の家も例外ではなかった。地震のニュースを受けて筆者が KB に電話をしたところ，余震が続く中，高位カーストの人々もそうでない人々も，金持ちも貧しい人も，皆一緒に協力し合って食事を（女性が）炊き出し，食べ，テントに寝たと興奮して語った。このような状況を示す語りは，KB の村に限らず複数の地域でニュースとして発信されていたが，KB にとって非常に嬉しい経験だったと考えられる。しかしながら，一緒に食事を作って食べたのは 2 回だけで，その後は各家族に分かれて食事を作るようになったという。震災直後からバザールでモノが売られ，金のある人は必要なモノを買っていた。出稼ぎ者がいる家庭では，外国からの送金がその非常事態を切り抜ける支えとなった。支援物資としての米が赤十字から震災後 15 日目にようやく届いた。政府からも米 25 kgが配給され，倒壊した家の見舞金として 20 万ルピーを配布すると言われたが，とりあえず 15,000 ルピーが配られた。世界中から,「貧しいブータン」[31] からも支援金が送られたとニュースで伝えられた。しか

し，各地から公的私的に届く支援物資は公平にいきわたらない。KB は，ゴルカのダリット協会に届いた支援物資がサルキ Sārkī に横領され，震災後金持ちにより多くの支援物資が届き，貧しい者との間の格差がますます広がったと語る。こうした語りは随所で聞かれ，真偽のほどは確かめていないが，社会的弱者が非常時により周縁化される状況が容易に想像されることから，俄かに否定もできない。

体制転換や地震という非常事態の瞬間に，KB は社会が大きく変わる／変わりそうな局面を見出すが，それなりに落ち着くと元に戻っていく，あるいは震災後のようにさらに悪化していくと言って嘆くのである。

5. おわりにーKB の生活世界ー

KB はガンダルバの中では成功者として認識されている。カトマンドゥに出稼ぎに行くようになった時，歌うことでラジオ・ネパールで現金収入を得られたことから服や靴を新調して帰村し，彼の存在が生まれ故郷のラムジュンの村の人々を次々とカトマンドゥへ送り出す契機となった。もともと生産手段を持っていなかったガンダルバにとって，移動が生産手段となっていたが，固定的なパトロンークライアント関係を持っていなかったことから，その行先は流動的であった。インフラの拡大に伴い行けるところに足を延ばし，自身を受け入れてくれそうな場所を見出し，自身の活動範囲を広げてきた。その中で社会関係を構築して様々な可能性を開拓してきた KB にとって，2 人の息子を外国に出稼ぎ・留学に送り出したことは，幸運がなければできないことではあるが，ガンダルバの生業からすると想定内であったといえる。国境を越えて移動することは，ネパール社会において 1990 年代以降増加している外国への出稼ぎの波に乗ったように見えるが，長男がフランスに行くことになった個人的な幸運と，行った先での困難も含めて，KB が既に経験してきたことの延長上に位置づけられなくもない。近年のネパールからの出稼ぎ者の増大は，ネパール社会において消費社会化した暮らしを送るのに十分な生産手段がないことが要因であり，行った先々で移民として差別を受けるようになっている状況は，いわばガンダルバがその社会の周縁者として既に経験してきたことと重ねられよう。

KB は，かつては歩きながら直接会った人々を対象にジャンクリとして施術をしてきたが，今日では携帯電話によって直接会っていない人からも施術を求められる。KB の道具袋の中には治療に使われる薬草等の小道具が入っているが，近代医学では考えられないものが多い。近代的な病院で診察を受ける際は，まず名前や年齢，性別，住所が尋ねられるが，KB は不調者の主訴を聞くのみである。他方で娘が近代的病院の看護師になることを応援し，カトマンドゥの学校に通わせている。村の家では食肉需要に伴い家畜を飼育し，川で釣りをして大きな魚が獲れればバザールで売るし，そうでもなければ自家消費とする。このように，ネパール社会が変化する中で，生得的な属性に由来する生業や文化に資本主義的な経済活動を組み合わせてきた。彼が歩き，歌ってきた行為とそこで構築してきた社会関係を戦略的に多様化させ，資本主義仕様に流用することで，変化にうまく対応してきたのである。彼らの保持してきたサランギの弾き語りを主とする生き方 a way of life は全体としては減少してきているが，移動に着目してこの変化を見ると，彼らの生活手段である移動は次世代ではるかに大きな可能性を孕んで，国境を越えて展開していることが分かる。KB が成功している要因に，歩きながら習得・体感してきた心象地理と，変化する社会に対する洞察力が挙げられよう。ネパールでは，サランギや肉食・飲酒は，もとは社会的周縁の象徴であったが，それらが必ずしも社会的周縁の象徴でなくなる変化の過程で，KB は諸機会を自分のものにできたと言える。成功の証となったのが，KB が苦労をして建てた家であった（**写真 9**）。

KB の建てた家の隣に 3 階建ての家が建てられた[32]（**写真 10**）ことから，長男もまた，成功したラフレとして認識されている。長男は出稼ぎ先のフランスで市民権を取得し，所帯を持ち，時々KB

写真 9　KB の建てた家（2009 年）

写真 10　KB の息子が建てた家（2014 年）

に送金している。長男がネパールに戻ってくるか分からないにもかかわらず，KB は 13 部屋ある家を建てた。彼は 2014 年の時点で「村で一番大きな家」と自慢していたが，ラフレの多い村であることからさらに大きな家が複数建てられ，一番大きな家ではなくなった。一番ではなくても大きな家は，成功したラフレの象徴である。その家は，KB にとって実用というより，その土地に不動のものとして，可視的に示すことのできる現代ネパールを生きる者としての成功の象徴であった。このことは，ジャラクマンやラム・サランがスティグマとして苦しみ続けた音楽家として生きること，即ち不可触カーストとして村々をサランギを携えて歩き，人々に弾き語り続ける以外の選択肢がなかった時代とは違う状況，具体的には移動を通じて必ずしも従来通りの生得的な属性によらない生き方 a way of life を実現する可能性を示している。

2014 年のダサインの時には，給電が十分にない村でありながら，息子の送金の中から 44,000 ルピーをはたいて韓国製の薄型大型テレビを家に設置した。KB が神棚を設置した台所で，ダサインの歌をサランギを奏で歌っていた時に，それに関心のない KB の妻はすぐ隣の部屋でタバコを吸いながらテレビを大音量にして見ていた。他方，息子不在の為に娘が供犠をする雄鶏を逃げないように押さえて儀礼を手伝い，携帯電話で父親の歌う姿を動画で撮っていた。娘がその場で父親の儀礼を手伝い，やり方を見て記録していたとしても，現時点のネパール社会で女性が供犠することは考えにくい。今のところ，KB の知識や技術は子供達に伝えられていないし，また，KB は自身と同じ生き方を息子や娘に期待せず，むしろ違う生き方を期待している。そう望むことによって，KB の生活世界は国境を越え，かつトランスローカルに広がり，前近代と近代，グローバルな現代が共存するような状況になったのである。

社会的周縁に位置づけられてきた KB が，移動の中で様々な境界を歩き，越え，他文化と接触してきた過程は，これまで述べてきたように，様々なものがトランスローカルに入り組み，KB を中心とした複雑な地図と歴史となって立ち現れてくるのである。

謝辞

本稿で取り上げた KB をはじめとしたガンダルバの理解と協力なしに長きにわたる調査を続けることはできなかった。また，本研究の調査のいくつかは，科学研究費補助金（代表者名和克郎，基盤研究（B）24320175，及び代表者南真木人，基盤研究（B）16H05692）の助成を受けて行った。併せて謝意を表したい。

注

(1)　ネパール共産党毛沢東主義派（現ネパール共産党統一毛沢東主義派）。1996 年に反政府武装闘争を開始し，ネパールの広範囲にわたって活動を展開した。これを受けて警察や王国軍（当時）が出動し，両者の戦いが続く中で多くの犠牲者が出た。

(2)　World Bank によると，GDP に占める海外送金の割合において，ネパールは世界第 3 位となっている（2014 年のデータ）。（http://www.worldbank.org/en/topic/migrationremittancesdiasporaissues/overview）

(3)　本稿で生業について述べる時，ガンダルバ全体を代表するような書き方をすることになるが，基本的にガンダルバの男性が村々を歩き，歌うことで金品を得る生業に従事してきた。他方，女性や高齢者は村でサブシスタンスな活動に従事してきた。

(4)　ジャートとは，ネパールにおいて生まれながらにして所属が決まる生得的な社会的範疇であり，社会における人の生き方を規定する操作概念にもなり得る。その境界は民族，カースト，宗教，居住地等により決められ，近年ネパールにおける社会的包摂の議論を背景に新しいジャートが多数創出されている。例えば，1991 年センサスに登録されたエスニック／カースト集団は 59 集団であったのが，2001 年センサスでは 110 集団，2011 年センサスでは 130 集団に増加している（Central Bureau of Statistics　1993, 2001, 2012）。また，ジャートの概念は重層的で，自分の属するカースト名をジャートという場合もあれば，更にその中で細分化されたものをジャートとすることもある。

(5)　ダリットとは本来抑圧されたという意味を有するが，被抑圧者が自身を指す自称として用いられる。1854 年に制定されたムルキ・アインにおいて「不可触」（アチュート achūt）と定められたのは鍛冶屋のカミ Kami，仕立て屋及び演奏家のダマイ Damai，皮なめし業者及び製靴屋のサルキ Sarki，吟遊楽人のガイネ Gaine（ガンダルバ）等のジャートである。但し，従来の「不可触」カーストとするかどうかは，地域によっても人によっても違いがある。山地ヒンドゥーの諸カーストの中では，鍛冶，仕立て，皮革職人等のカースト，ネワールでは漁師，清掃・汚物処理人等のカースト，タライのマデシの人々の間では，清掃・汚物処理人等々10 前後のカーストが入れられるであろうが，本人たちが自らをダリットとするかどうかは，カースト階梯に関する意識のみならず，政治意識や教育・知識のあり方によっても異なる（石井 2011: 448-449）。

(6)　ガンダルバをめぐる社会的包摂と排除について森本（近刊）を参照。

(7)　ガンダルバは，1991 年のセンサスに登録されている集団の中で 5 番目に少ないジャートであったが，2001 年センサスでは 24 番目，2011 年センサスでは 39 番目となっており（Central Bureau of Statistics 1993, 2001, 2012），人口的によりマイノリティとなる社会範疇が新たに創り出されていることが分かる。

(8)　森本（2012）3 章を参照。

(9)　ガンダルバの他にガエク，ガンダリ，ネパリ等も名乗る。

(10)　フクネとは，民間医療の行為の一つで，不調を訴える患者に対して息を吹きかけ，病魔や悪霊等を吹き払うことで治療を行う行為を指す。

(11)　ネパール人歌手への聞き取り調査（2016 年）。彼はガンダルバではなくサランギを弾く練習をしたことがないが，近々リリースする 2015 年の地震を歌った自身のミュージックビデオにはサランギを弾くガンダルバを登場させて，ロマンティックな雰囲気に仕上げたいと語る。ガンダルバの有名な持ち歌の一つである「1990 年（ビクラム暦）に起きた地震」を意識していると考えられる。

(12)　カトマンドゥのトゥーリズム空間に出稼ぎに来ているガンダルバの社会的文化的変容について，詳しくは Morimoto 2002, 2008，森本 2008, 2012（第 7 章，第 8 章）を参照。

(13)　但し，著作権が保証されていないネパールにおいて，近年ミュージックビデオが製作されて YouTube にアップロードされると無料でダウンロードできるため，ガンダルバに限らず音楽関係者全体が困難な状況に陥っているという（2016 年，カトマンドゥの音楽スタジオでの聞き取り調査）。

(14)　ネパールの公式暦で，西暦紀元前 57 年を起年とし，西暦の 4 月から新年が始まる。

(15)　バラトプールはネパール中南部の都市。ネパールでは当時地方空港の開発を進めていたが，実際に当時その路線に飛行機が就航していたかどうか，筆者は確認していない。現在ゴルカの空港は閉鎖され放置されている。

(16)　現在 KB の家がある村からほど近い谷を流れる川。

(17)　ネパールのヒンドゥー的社会における最大の祭り。

(18)　サランギに並びガンダルバに特有とされる楽器。サランギより丈が長く持ち運びが困難な為，アルバージを携えて歩くガンダルバは極めて少なくなり，それに伴いアルバージを作ったり弾いたりするガンダルバも少なくなった。

(19)　米を蒸して杵でついて干した保存食。カトマンドゥを故地とする民族，ネワールが間食として好んで食す。

(20)　ヒンドゥー的カースト的社会において，ガンダルバが他ジャートの人が使っている水場を使うことは，他ジャートの文化的禁忌に抵触し，慣習的に避けられていた為，水を使うことが困難であったことも一因と考えられる。

(21)　イギリス軍やインド軍の傭兵となった出稼ぎ者。グルン Gurung やマガール Magar 等山地民族出身者が多い。現代では傭兵に限らず，出稼ぎ者を総称する言葉として用いられている。ネパール社会では，ラフレという呼称は出稼ぎにより相対的に裕福になった人というニュアンスを含む。

(22) 実際は 10〜11 月頃の米の収穫期に村歩きをすることが多い。
(23) ムルキ・アインにおいて，カースト的ヒエラルキーの中で高位に位置づけられるカーストにとって肉食，飲酒は文化的禁忌とされる。グルンは山地民であり，高位カーストと違って肉食，飲酒を禁忌としない。
(24) 高位カーストの人々が彼らに与える食料等には彼らの好物の肉や酒はなく，気前があまりよくないという意味。
(25) ネパールにおいて最も貧しい人々として認識されるジャートの一つ。ガンダルバも最も貧しい人々と考えられてきたが，KB はチェパンの人々を自分よりも貧しい人々，施しを与える対象と考えていた。
(26) 1903 年に建てられた首相の邸宅で，その時の首相の権勢を象徴するような広大な庭を擁した西洋風の大邸宅。当時アジアにおいて最大級の建物とされた。失火により燃え落ちた時は，中央官庁の建物として転用されていた。先述のジャラクマンが作ったシンハ・ダルバールが焼け落ちたことを歌った歌も，ガンダルバの有名な持ち歌の一つである。
(27) タメルとはカトマンドゥで最大のトゥーリズム空間。詳しくは森本（2012）を参照。
(28) ガンダルバは，ヒンドゥーであっても，村で近くに住む同じ職業カーストの皮革職人のサルキが処理した牛の肉を一緒に食べたり，トゥーリストに誘われてレストランで牛肉ステーキを食べたりすることに対して，他のジャートに比べて抵抗が小さいといえる。
(29) 1 パティは約 4.5 リットル容量の容器 1 杯分。
(30) 北西部ヒマラヤでは移動手段として馬が用いられているので，当地に行けば容易に手に入る。
(31) KB は「貧しいブータン」と表現したが，World Bank によればブータンは南アジア 8 か国中一人当たり GDP は 3 番目に高い。ネパールは 7 番目である（2015 年）。（http://data.worldbank.org/?locations=8S-BT-IN-MV-LK-PK-NP-BD-AF）
(32) 2015 年 4 月の地震で彼の建てた家の前壁以外が倒壊し，長男の外国からの送金でその隣に建てたコンクリートの家にはひびが複数入った。自分が苦労して建てた家は天井が崩落し，中に入れる状態ではないものの，最後に残った前壁を取り壊すのは忍び難いと 2016 年 8 月時点でも残したままであった。

参考文献

アーリ，ジョン
2011『社会を越える社会学：移動・環境・シチズンシップ』法政大学出版会。Urry, John, 2000, *Sociology beyond Societies*, Routledge.

石井溥
2011「流動するネパール，あふれるカトマンドゥ盆地」『南アジアの文化と社会を読み解く』鈴木正崇（編），pp.435-471，慶応義塾大学東アジア研究所。

今井史子
2003「ガンダルバの「職業」」『金沢大学大学院社会環境科学研究科・社会環境研究』第 8 号，pp.117-127。

カプラン
2003『移動の時代――旅からディアスポラへ』未來社。Kaplan, Caren, 1996, *Questions of Travel: Postmodern Discourses of Displacement*, Duke University Press.

クリフォード
2002『ルーツ――20 世紀後期の旅と翻訳』月曜社。Clifford, James, 1997, *Routes: Travel and Translation in the Late Twentieth Century,* Harvard University Press.

森本泉
2008「トゥーリストの来た道を遡行する――アイルランドに渡った出稼ぎネパール人ガンダルバの事例――」『お茶の水地理』48: pp.73-89。
2012『ネパールにおけるツーリズム空間の創出――カトマンドゥから描く地域像』古今書院。
2015a「カトマンズにおける都市空間の変容――グローバル化と創造的破壊」『広島大学現代インド研究――空間と社会』5：pp.1-14。
2015 b「ガンダルバの歌うネパールの変化――王政から国王のいない民主主義へ」『現代ネパールの政治と社会――民主化とマオイストの影響の拡大』南真木人・石井溥（編），pp.231-265，明石書店。
近刊「ガンダルバをめぐる排除／包摂――楽師カースト・ガイネから出稼ぎ者ラフレへ」『体制転換期ネパールにおける「包摂」の諸相――言説政治・社会実践・生活世界』名和克郎（編），：pp.165-197，三元社。

Central Bureau of Statistics
1993 *Population Census 1991 Nepal*. His Majesty's of Government Nepal.
2001 *Population Census 2001 Nepal*. His Majesty's of Government Nepal.
2012 *National Population and Housing Census 2011*. Government of Nepal.

Chhetri, Gyanu
1989 "Gāineko Sārangī euṭā māgne bhado ki Nepali Samskritiko Amga?: Ek Sāmājasastriya Drstikon" (in Nepali). *Contributions to Nepalese Studies* 16(1): pp.55-69.

Gurung, Bhokraj
2014 *Dynamics of Interplay between Caste and the Sarangi-A Study on the Gandharbas of Nepal*, Master's thesis submitted to Cultural Anthropology and Development Sociology, Leiden University.

Hitchcock, John T.
1975 Minstrelsy, A Unique and Changing Pattern of Family Subsistence in West Central Nepal, In *Explorations in the Family and Other Essays*. Dhirendra Narain (ed.), pp.305-323. Thacker & Co., LTD.

Höfer, András
1979 *The Caste Hierarchy and the State in Nepal : A Study*

of the Muluki Ain of 1854. Universitätsverlag Wagner.
Kisan, Yam Bahadur
2005 *The Nepali Dalit Social Movement*. Legal Rights Protection Society Nepal (LRPS).
Macdonald, Alexander W.
1975a The Gaine of Nepal. In *Essays on the Ethnology of Nepal and South Asia*. Alexander Macdonald W. (ed.), pp.169-174.
1975b The Healer in the Nepalese World. In *Essays on the Ethnology of Nepal and South Asia.* Alexander Macdonald W. (ed.), pp.113-128.
Morimoto, Izumi
2002 "Adaptation of the Gandharbas to Growing International Tourism in Nepal". *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies* 14: pp.68-91.
2008 "The Changes in Cultural Practices and Identities of a Nepali Musician Caste: The Gandharbas from Wandering Bards to Travelling Musicians". *Studies in Nepali History and Society* 13(2): pp.325-349.
Nepali Folklore Society
2009 *Gandharva Folklore and Folklife*, Nepali Folklore Society, Kathmandu.
Nepali, Purna
2003 *Gandharva Sangīt ra Samskriti* (in Nepali). Sanyukta Rāstriya Śaiksika, Baighyanik tathā Sanskritika Sansthā UNESCO Office Kathmandu.
Weisethaunet, Hans
1997 "'My Music is My Life': The Identification of Style and Performance in Gaine Music". *European Bulletin of Himalayan Research*. 12(13): pp.136-151.
1998 *The Performance of Everyday Life: The Gaine of Nepal*. Scandinavian University Press.

HP（2016 年 9 月最終閲覧）

World Bank http://www.worldbank.org/en/topic/migrationremittancesdiasporaissues/overview
World Bank http://data.worldbank.org/?locations=8S-BT-IN-MV-LK-PK-NP-BD-AF